**木村 助男 （きむら・すけお）**

**１、プロフィール**

方言詩人。方言詩誌「芝生」（カガワラ）同人となり、方言詩を同誌に発表。自選の未発表の方言詩35篇を収録した方言詩集『土筆』（ベベコ）は没後まもない昭和18年８月10日に刊行された。

＜生没＞

1916（大正５）年３月14日 ～ 1943（昭和18）年７月30日

＜代表作＞

方言詩集『土筆』（ベベコ）

＜青森との関わり＞

北津軽郡飯詰村（現五所川原市）に生まれる。横須賀海兵団から傷痍軍人として帰郷後、郷里で療養生活を送りながら方言詩を創作した。

**２、作家解説**

方言詩人。大正５年３月、北津軽郡飯詰村福泉（現五所川原市）に生まれる。昭和７年３月、飯詰高等小学校卒業。昭和12年１月１日付で横須賀海兵団に入隊し、上海・厦門などの南支上陸作戦に参加する。昭和13年７月、肺結核に冒され、厦門野戦病院に収容、14年には横須賀海軍病院に護送される。後に木村はこの頃のことを回想して「自身に何か変わった時でなければ、余り郷土を考へないものである。私が有難い土地だと考へたのは、戦病に依っての野戦病院以後である」（方言詩集『土筆』（ベベコ）後記）と記している。16年、海軍を除隊され、傷痍軍人となり帰郷する。

故郷で療養生活を送る中で、「月刊東奥」掲載の一戸謙三の津軽方言詩に出会い、「今迄で考へ続けていたのが此だ！」と感銘を受け、夢中で方言詩を書いた。「月刊東奥」方言詩欄に投稿し、一戸の指導を受けるようになる。17年４月、日幌草太・小枝九郎らによって再刊された方言詩誌「芝生」（カガワラ）の後期同人となり、「春」（５号）、「梅の花コ」「春」（６号）、「旧暦」（７号）、「初夏」「宵宮（ユミヤ）」（８号）、「秋の暮」「十五夜」（９号）、「秋の暮」（10号）を発表した。

方言詩の創作に熱中した木村は、やがて詩集刊行を決意し、18年２月、在京の藤田重幸に方言詩集『土筆』（ベベコ）（未発表の自選詩35篇）の原稿を送り、刊行を依頼した。しかし７月30日、病状が悪化し、逝去。わずか11日後の８月10日、ガリ版刷りの方言詩集『土筆』（発行所 抒情性クラブ）が刊行されたが、木村がこの詩集を見ることはかなわなかった。

詩人・福田正夫は、この詩集の「序」において、「終りの長篇『養鶏』には泣かされた。そして戦陣にあつて、故郷を思ふの情深ければ深い程、野戦病院での方言思慕が木村君を駆つて、この一巻を成さしめたと思ふ」と記している。

木村助男が名付け親となった甥の捷則によって、平成４年の50回忌にあたり方言詩集『土筆』の復刻版が刊行され、飯詰高楯城のふもとに「木村助男詩碑」の建立が果たされた。

**３、資料紹介**

〇方言詩集『土筆』（ベベコ）

図書

1943（昭和18）年８月10日

183ｍｍ×130ｍｍ

昭和18年８月、叙情性クラブより発行。編集は藤田重幸（蘭繁之）。標題作ほか、未発表の方言詩35篇からなり、巻頭に福田正夫「序」、巻末に藤田重幸「跋」、木村助男「後記」を収めたもの。

 　平成４年の50回忌にあたり、甥の木村捷則により復刻版が刊行された。